

---

# 世界法則の解

クイックロード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界法則の解

### 【Nコード】

N6831S

### 【作者名】

クイッククロッド

### 【あらすじ】

死んだ。悲しんだ。恨んだ。そして、壊した。過去という鎖を断ち切るだけの勇気を持ち合わせていない少年は、過去に蓋をした。そして静かに歯車が動き出し、少年はそれに巻き込まれていく。

近未来の世界にて繰り広げる、この世の物理法則を巡る戦い。これは、そのほんの一部である。電撃大賞応募予定の作品です。アドバイス等、よろしくお願いします。

## 人物紹介

あまのがみしんら  
・天上新等

> i 2 6 3 2 6 — 6 3 1 <

> i 2 6 3 2 7 — 6 3 1 <

> i 2 6 3 2 8 — 6 3 1 <

> i 2 6 3 2 9 — 6 3 1 <

（ お好きな絵でイメージしてください ）

一七歳にして博士号を取得し、論文引用数トップクラスという、正に『天才少年』の名に相応しい業績を持つ。専門は物理学科だが、それ以外の学問に対する興味もあるようだ。

不器用故か、実験をすれば必ず失敗する。そのため、『天上が近付くと実験の死神が舞い降りる』、『ヤツを実験室に近づけてはいけない』などとプレシード学園では言われる始末だが、事実その通りである。

しかし、彼の洞察力と好奇心、そして徹底的に答えを求める姿勢は本物である。どんな学者も出来ないようなことを平気でやって退ける辺り、流石だ。

その反動からか、コミュニケーションや常識が欠けており、博士号を得るまでは引きこもっていた。

ホームクルス

人造生命体であり、彼もそのせいで肉体的な迫害を受けて育った。また、それが彼のコンプレックスになっている。

亡き親友・カックワードの幻覚を頻繁に見ており、会話もしてい

る。彼の友人は幻覚と物理学だと断言しても良い程だ。精神科医からは、重度の幻覚症を患っていると判断され、薬も服用している。能力は『欠陥の生成』。欠陥物質と呼ばれる、極めて不安定な物質を作り出す事が可能である。オーラは不安定であり、常に数値が変動している。それゆえ、『欠陥品』と称される事が多い。愛用の陽子銃は彼自身が作成した物であり、小型粒子加速器に分類される。内部には欠陥物質を構成する正体不明の元素から陽子を剥ぎ取り、それを小型粒子コライダーに押し込め、陽子ビームとして射出する機構が備わっている。残った陰イオンは電力源に使用される。

・マキナ

> i 2 6 2 8 4 — 6 3 1 <

年齢不詳だが、見た目はかなり幼い。

天真爛漫な性格であり、新等とは対照的に誰にでも突っ掛かる性格である。

その挙動・言動は、落ち着きの無い小動物を連想させる。人類最大の『意識』を保有しており、『世界法則の解』と呼ばれる。

事実、彼女の手の中に世界の全てが握られている。

・アリシア・ブロード

新等より一つか二つ上の少女。  
冷たく、鋭い雰囲気拒絶をばら撒く。

しかし、意外と感情で動く面がある。

ソーディネル社一の戦力を誇るエースであり、重力制御の能力はそれを証明している。

オーラは二〇〇〇を超えており、世界トップクラスである。

二つの能力を保有しており、片方は『亜空間フィールド形成』、片方は『重力子加減速』である。重力の源となる重力子を加減速させる事で、重力を制御するのである。

しかし、自然界において光速を超える事は不可能である為、重力の増加は不可能である。そのため、重力子を亜空間フィールドで加速させる事で超光速を実現し、重力の増幅を可能としている。

#### ・ホメロン教授

プレシード学園にて教授を務めている男。

二〇代前半で、快活さに溢れている。

彼の瞳は、常に好奇心で輝いている。

ただし、その好奇心は常人には理解出来ない点に発揮される事があり、他人に『変人』と称される事もしばしばである。

その辺りは、新等と似ているのかもしれない。

#### ・清演せいえん顕路けんろ

『世界警察』と呼ばれる、国際的な治安組織にて特殊部隊の隊長を務める少年。

その戦力は凄まじい。

片腕が義手になっており、そこには深い訳があるようだ。  
新等とは刺々しい仲にある。

・カックワード

> i 2 6 3 2 4 — 6 3 1 <

新等の親友であつた少年。既に死亡している。  
現在は新等の幻覚として度々現れる。  
ただし、その幻覚の人格と本来のカックワードの人格には、僅か  
ながら摩擦があるようだ。

## 第一解

### 導入

機械的な電子音が、ペースメーカーのような規則さで断続を繰り返す。

宇宙服を一回り薄くしたような服装の男女たちは緑や赤のランプが踊るキーを、一心に叩き続ける。その度に得体の知れない数字が青いモニターに浮かんでは処理されていく。

Project - Dark Matter .

青く浮かぶ、その巨大な立体文字がやけに目に残る。

宇宙空間に送り出された、スペースシップ。二〇一二年に打ち上げられたこの船体は、宇宙空間の二割を構成している未知の物質・ダークマター暗黒物質の解析という重大ミッションを背負っているのだった。

クルーたちはその責務に操られ、疲労すら無視してひたすら人類の期待に従事する。

と、その時だ。

船内のモニターというモニターが、『異常事態』を示す赤文字に支配されていく。警報が唸りを上げ、喧しい事この上ない。

クルーたちは慌てもせず、冷静に異常事態の解析に乗り出した。異常事態を想定した訓練は大分積んできたのだから、この程度では慌てない。だが、解析画面に表示されたのは、とてつもないエネルギー量だった。ここから数キロの地点に、膨大な量の放射線、電磁気、プラズマが検知されたという結果だった。それらが一箇所に集まっているのだから、溜まったものではない。そんな場所に突入すれば、この船はたちまち崩壊してしまうであろう事は容易に予想できる。

慌て出すクルーたち。駆けつけた船長は、苦渋の色を顔に滲ませていた。

「この船の速度をいくら落としても、突入には間に合わない。かといって、無理に方向転換をすれば船体が押し潰されてしまう。……地球に判断を仰いだ所、『高エネルギー密集地帯の別名は光子の帯』……と、名の通り光が密集した地帯である。危機回避の方策は間に合わない。判断はそちらに任せる』……との事だ。キミたちも馬鹿ではない。この意味が分かるかね？」

戦慄と悪寒が走った。地球の者達は、明確にこう宣告したのだ。『キミたちの事を見捨てる』、と。突きつけられた明確な死。等身大の恐怖。その気配を身近に感じて、クルーたちは愕然とするのだった。

死の領域へと、船は徐々に迫る。

クルーたちは窓越しに、眩い輝きを認識した。光子の帯だ。オ  
ーロラの数倍は美しい光の領域。だがそれは、今のクルーたちにと  
っては神秘性ではなく死刑宣告を意味していた。

「みんな、すまない」

白一色に塗り潰されていく世界の中で、船長の微かな声だけが響  
いた。絶望一色に染め上げられていくクルーたち。

そして。

一瞬にして、それは起きた。

皮肉げに白い光を放射する光子の帯　その輝きの中を、金色  
の人影が一閃したのだった。たちまち白い闇は薙ぎ払われる。まる  
で、宇宙人と遭遇したかのような表情になるクルーたち。無理もな  
い。彼らの前に立っていたのは、金色の輝きに包まれた少年だった  
のだから。

人ではない、金色の化身は口を開き、得意げにこう言うのだった。  
「>世界法則の解く、解放　!!!」



手記の記述は、ここで途絶えていた。

二〇二二年二月二十五日。

数十年前の、ちょうど今日。

人類全体にとっての革新となった、『フォトンベルト光子の帯への突入』は起きたのだという事に、少年は『事実』を再認識し、熱い物が込み上げてくるのを確かに感じた。

間違いない。

そう確信した少年は、新たな信念と力と共に歩み出す。

## 第二解

### 第一解

少女の金色の瞳には、複雑カオスと呼ばれるに相応ふさわしい光景が映し出されていた。簡潔に言ってしまうえば、殺し合いである。

湿々とした灰色の倉庫の中で、人が人ならば、紛争と見間違えてしまうであろう程の苛烈かれつな攻防が繰り広げられていた。

閃光が飛び交い、硝煙の臭いと共に鮮血が踊る。毎秒という勢いで、小規模の爆発が空気を押し上げる。

まともな光景ではなかった。少女は怯え、震える。この戦乱原因の中心が自分にあるのだという事実に、単純な恐怖を覚える。

身を震わせる少女をまるで別世界の住人であるかのように無視し、攻防は加速していく。

『敵の残り数は五人！ 油断は決してするな。その上で迅速にあの少女を回収しろ！』

#### 【了解】

頭の中で響く『声』に対して、頭の中でだけ返答する。だが、無線も何も装着していないというのに、その『念』に対する明確な応答があった。

『気をつける、天上。正規のメンバーじゃないオマエなら、どんなミスを犯しても不思議じゃない』

【嫌味か。偉くなったじゃないか、顕路けんろ小隊長？】

『なったのではない。実際に偉いんだ。少なくとも、オマエよりはな』

【ケツ、いちいち嫌味なヤツだなあ】

『思念が漏れてるぞ』

テレハシー  
不毛な会話を続ける二人へと、流石に止めが入る。

『集中してください、二人とも！ 油断するなど、貴方自身が言っ

たばかりでしょう、顕路小隊長！』

呆れを含んだ声に制止され、休戦を取る天上と顕路小隊長。天井無しの罵り合いだけは何とか回避されたようだ。

小隊長と険悪な仲にある黒髪の少年・あまのがみしんら天上新等は、小隊長との『共通の敵』である群を目に留めた。

どういつもこいつも髭面だったり薄汚れていたり、何とも悪党の雰囲気を漂わせていた。実際、悪党なのだから仕方がない。彼ら五人の背後で縛られ、恐怖のあまり涙を浮かべている金髪金眼の少女がそれを証明してくれる。

（明らかに場違いなあの少女が、今回の『保護対象』か。敵の残り数は五人。武装品は精々、せいぜい軽量と持ち運びの為に破壊力を犠牲にしたようなモノばかり。爆薬なんかもない。考えるのも馬鹿馬鹿しいけど、『マイクロブラックホール・キャノン一特異点射出砲』やら小型核兵器なんてトンデモなヤツが出てくる気配なんて微塵もない。これなら、行けるはずだ。危惧すべきなのは、ヤツらも持っているである念響メキンについてか）

推論し終えると、あまのがみしんら天上新等はそれを即座に行動へと移した。

こめかみの部分を、人差し指で軽く二回ほど叩いてみせる。戦闘中にしては、些いささが緊張に欠ける行為に見えるかもしれない。だがそれは、決して意味の無い行動ではない。

しんら新等がそのような行動をした直後　こめかみの辺りから、突如として金属棒のような物質が現れた。更に、その先には徐々に青く半透明のレンズのようなモノが出来つつあった。

「……つと、装着完了」

そう言った新等の目を覆い隠すようにして、青く半透明のレンズが周囲の景色を僅かに反射させている。花粉症対策に特化したゴーグルを薄く、青くしたような液晶には、青みがかった景色以外にも数値データが映し出されている。

それを見た新等は僅かに眉を顰め、同時に念じた。

【おいおい。どうすんだよ。アイツらの交響オーラ、予想GUYな数値を弾き出してるぞ】

『何だその発音は。ふざけてるのか？ まあいい。数値を言え』

【五人合計で、約一〇〇程度。念響<sup>メギン</sup>の数や中身によつては、戦線を崩壊させられるぞ。どうするんだよ、小隊長さん？】

『ん？ ああ、平気さ。忘れたのか？ 俺の交響<sup>オーラ</sup>は 一五〇〇だ』  
ゴツッ！ と。

空気すら爆発させるような勢いで、小隊長・顕路の姿が移動するのを、新等は目の端で捉えた。顕路の脚の辺りには、青白い電撃のようなモノがチラついているようにも見える。どうやら、それが顕路の射出装置となっているようだ。

亜音速特有の爆音を生身で実現した顕路は、安心と安定の無感動な口調で言うのだった。

「『世界警察』だ。大人しく降参しろ。応じない場合は武力の行使が許可されている。そちらの少女を引き渡す」

重たい金属音が炸裂した。磁力によって僅かに滞空した顕路の肩へと、鈍器が叩き込まれた音だった。

顕路は僅かにこめかみをピクつかせ、

『……なあ、武力行使してもいいか？』

【勝手にすれば？】

新等のその言葉が引き金となり

寂れた倉庫に、絶叫<sup>ハイモーン</sup>の重奏が響き渡った。

### 第三解

石造りの床に、ドバツと水が放たれた。

『ワンヘイト実験室』。

そう記された部屋の中で、ちよつとした騒ぎが起きていた。

「ちよつ、これはどういう事なんだね！？ 新等<sup>しんら</sup>くん！？」

髭面の、誰が見ても『ああ、この人は研究者なんだろうな』と直感的に思うであろう容姿の男が叫ぶ。ご想像の通り、男は薄汚れた白衣を纏っていた。

対して、純白の白衣を纏った黒髪の少年は苦笑してみせる。

「いやー、超伝導体いじつてたら機械から水が――」

「何で水！？ どうやったら機械から水が！？ 訳が分からないよ――」

「あれっ。教授、何だか黒煙が……」

「ちよつ、爆発するよコレ！？」

「とりあえず、事態の鎮静を第一に考えましょう」

「何とかしておくれよ！ 私のせいじゃないし！」

「いやあ、一人の科学者として助言しただけで、僕は大事な事は――」

「オマエのせいだろ！！ 何とかしてよ！！」

「あつ、もう遅いですよ」

高圧電流のような音が聞こえると同時に、衝撃波が教授の体を叩く。

御老体にはキツいだろう。

それでも、声を振り絞って彼は叫ぶのだった。

「出入り禁止 ツツ――」

そんなこんなで、犯罪者たちを殲滅するという、とっても暴力的な任務を終えて錆臭い倉庫から帰還した新等だったが、……

「はあ……」

盛大な溜息を付きたくなるほど、悲惨な出来事が起こってしまった。要するに、まあ……実験器具を破壊して、実験室への立ち入りを禁止してしまったのだ。後でまた、キツイお説教が待っているに違いない。何よりも精神的にキツイのは、後で書かされる事になるであろう、始末書の束だ。

実験用の白衣を脱ぎ、ロッカーの中に放り込む。その直後で忘れ物に気付き、白衣のポケットから一枚のカードを取り出した。そこには、新等しんらの顔写真と共にIDナンバーやらが刻まれており、目立つ文字で大きく『プレシード学園、物理学科研究員・天上新等あまのがみ』と書かれているのだった。

### プレシード学園。

その名前を見て、新等は思う。

（世界最高の研究・教育機関、か。まったく、名誉ある地位だよな）  
普段着である、白黒の野暮ったいパーカーのポケットへと、カードを突っ込むと、新等は自身専用の研究室から出て行った。

ポケットに両手を突っ込み、不気味さすら感じるほど純白な床を睨みつける。

研究者らしからぬ歩き方だが、新等はそんなもの気にしていなかった。

新等がこうして俯うつむきながら歩くのは、いつもの事だった。

理由は、彼以外には理解できないだろう。

奇異きいの視線が、下級生や研究者から投げかけられる。そこには、忌避感や哀れみも籠こもっていた。

（……まったく）

原因は、ただ一つ。

(……そんなにジロジロ見て楽しいのかね。……)

彼の、瞳。

形が異常なのではない。その虹彩<sup>イロ</sup>が、極めて異質なのだ。吸い込まれそうな程の黒色。その中に、白い穴<sup>アナ</sup>がポツカリ空いているのだ。まるで、目の中に浮かぶ黒いドーナツのようだ。

『……まったく、その通りだね』

どこからともなく、声が聞こえた。

虚空から突然放たれた声へと、新等はボツリと呟く。

「カックワード」

声に応じるように、金色の輝<sup>キラ</sup>きが生じた。

いいや、正確には金色の輝きに包まれた少年の姿だった。

スラツとした躯体。鼻筋は高く、目はパツチリとしている。まるで幽霊のように半透明な少年は、美少年と称しても良さそうな程の美麗さを誇っていた。

新等は、そんな『光の塊』を横目で視界に入れる。

金色の微粒子が空中へと舞い散り、場違いな絶景を演出していた。

『確かに、周りの人間の価値観は訳が分からない。だけど、キミもキミだ。いちいち他人の事を気にするな、ってボクに言ったのはキミだったはずだよ?』

〇の字をした瞳を、なるべく人目に晒さないように下へと向ける新等。

そんな彼に対し、金色の妖精・カックワードは感想を吐き出す。

『キミは、周囲の人間とは違う。それはキミだって分かってるし、ボクだって同じ悩みを抱えて生きてきたつもりだ。確かにキミは……、』

俯き、顔に影を作る新等に対し、カックワードは容赦なく言い放った。

『……ホムンクルスさ。だけど、それがどうした。『人造生命体の象徴』であるその瞳を、喜んで外気に晒してみるのも面白いとは思

わなにかい？』

気まずい沈黙があつた。

その中で交わされるのは、どのような感情なのだろうか。

それは、当人たちにしか分からない。

そして、一方的な説教を受けた新等しんらの方から、それを破る。

「……カックワードはそんな事言わない。やつぱり お前は、お前の死を受け入れられなかった俺が作り出した、幻覚なんだな……」

その声色には、俄にわかに、否定してもらいたいという音が籠められているようであつた。

だが、カックワードは何も答えない。

肯定。

つまり、そういう事だ。

分かっていた事とはいえ、やはり抵抗がある。

新等は諦めたような表情になると、ふて腐れたような歩調で進み始めた。

カックワードの姿が見えていない周囲の人間には、新等が独りでブツブツと喋っているように見えたのだろう。

彼を避けるようにして、空白が出来ていた。

(……クソ)

頭の中で、毒付いた。



### 第三解（後書き）

金色って目に優しくないですね。  
目が痛くなります。

## 第四解

そうしてまた、陰鬱いんうつな気分を乗せて歩を進ませる。  
暫く進んだ所で、氣付いた。

亡き友の幻覚が、ゆっくりと消えていく。

その事に複雑な感情を覚えながらも、新等は『目的地』に向かつて突き進む。

数時間前の任務と実験室立ち入り禁止事件によって　まあ、自分が悪いのだが　精神的にボツボツにされようが、世間様というの是一切容赦ようじやをしてくれない。

ちなみに、任務の内容は、テロリストから少女を奪還だっかんせよ、とかいうハリウッド映画にゴロゴロ転がっていそうな、ありがちな物だった。

一七歳にして最前線の物理学者という、正に『天才』という二文字が似合う少年・新等は表情の隅々すみずみにまで疲れの色を滲にじませながら、歩いていく。

カックワード  
幻覚の言葉が、ふと脳裏に浮かぶ。

『確かにキミは……ホムンクルスだ』  
ホムンクルス  
人造人間。

それは、科学以前の時代　錬金術れんきんじゆつの時代から、夢想されてきた、正に夢の技術。

人工的な生命の創造。

クローンとは違い、母体が必要とせず、完全に一からDNAを造り上げるといふ、神を冒瀆ぼうとくする考え。

あまのがみしんら  
天上新等は、そうした考えの基に、培養液の中で造られた存在だ。

その瞳の異質さが、それを証明している。

(……何が)

わなわなど。

どこに向ければいいのかも分からない、怒りと諦めを抱く。

(……一体、人間と俺の何が違うんだよ……)

何故、こんな思いをしなければいけないのか。

まったくもって、新等は理解できなかった。

人工的か自然的か。

違うのはそこだけだ。なのに何故ここまで、疎まれなければいけないのだ

ふと、新等の足が止まった。

原因は、壁に掛けられたポスター。

生徒のイタズラなのだろう。

赤で埋め尽くされた手書きのポスターには、『害を排除せよ！』などと物騒で攻撃的な言葉が並んでいた。

町中でも良く見かける、人道的な生命体に対する差別運動だ。まるで、ナチス・ドイツのユダヤ人迫害を彷彿とさせる。

実際、十数年前までは、世界ぐるみで人造人間への肉体的な迫害を行っていたものだ。

その頃のおぞましい記憶が、こういった運動を見る度に蘇ってくる。

(……収容所)

ポスターの端に飾られている、印象深い建造物が視界に入った。

(……俺が幼少期を過ごした、実験場だな……)

先ほど、ナチス・ドイツの例を出したが……実際に、同じような事が行われていたのだ。血と苦痛に彩られた幼少期。

トラウマを無理やり押し込めると、新等は首を振った。

そして、もう一度思う。

何が違うんだ、と。

ポスターから視線を外す。

これ以上、苦しい記憶と向き合っていられなかった。残念ながら、自分は二セモノのカックワードが期待しているほど、強い人間ではない。

更に陰鬱いんうつさを増した気分を何とか紛まらせようと、最近の研究について思案しようとした所で 見知った背中を見つけた。

小走りでその背中に近付くと、ばんぼんと肩を叩く。

向こうはそれに気付き、コチラへと目線を向け そして、嬉しそうな表情を浮かべてこう言った。

「やあ！ 新等しんらうくんじゃないか！ 今ちようど、君を探していた所なのさ！」

「こんにちは、ホメロン教授。……俺に、用が？」

茶色の癖たんせいつ毛。端正なその顔立ちは、学問の道よりも大勢の注目を浴びるような、レッドカーペットの上などが似合っているように感じられる。だがしかし、ホメロン教授の性格的にそれは無理だろう、と新等は感じていた。

「いやまあ、大した用じゃないんだけどね。君の方こそ、僕に用があるんだろう？ 言ってごらんよ」

「いえ、まあ……コチラも、大した用ではないのですが。量子力学りようしに関して、疑問に思う所がありまして……」

「それよりも、見てくれよ新等くん！ この蜂の巣を！ イカすと思わないか？」

ほら、またこれだ……と、新等は半ば諦めの念を抱いていた。すぐに話が脱線する、 とうか話聞けよクソ教授。

そういった、新等の悩みは一瞬にして吹き飛ばされる事になる。ホメロン教授が取り出した、球体。

あれ？

これって、何だか危ないモノじゃなかったっけ？

ははっ、綺麗きれいだなあ。六角形が綺麗に並んでるなあ。

「って、んな訳あるかああああああ！！ 何やってんですか、

教授！！ 蜂がブンブンいつてるんですけど！？ って、痛っ！？

危ないッ！ 危ないから早くしまってくださいッッ！！」

「はははっ、キュートだと思わないかい？」

「あなたの脳味噌の中身がどうなっているのか、是非とも解剖した  
い所ですね！ いいからしまってください！！」

#### 第四解（後書き）

蜂蜜って、美味しいですよね。

私はあんまり美味しいと思いませんけどね。

## 第五解

「えー、だつて」

「うるさい！ 仕舞え！ 駄々をこねるな！ あー、もう！ 子供に怒鳴られたぐらいで涙目にならないでくださいよ！ それでも二八歳かッ！？」

つか  
疲れるなあ、もう。

すなお  
素直に、新等はその思うのだった。

この人と話していると、まるで子供をあやしているかのような気分になる。

教授の瞳はいつも活き活きと輝いていて、常にテンションMAXなのだ。

「まったく、新等くんはワガママだなあ。しょうがないから仕舞ってあげるよ」

何でエラそうなんだよ。

実験室の教授が聞いたなら『お前がな！』と胸倉を掴みそんな事を、心中で呟く新等。

学園内のパニックの元凶を作り出したホメロン教授は笑顔のまま、謎の黒い箱に巢を収めた。何かしらの薬品の効果なのか、蜂共も素直に箱の中へと入っていく。そこで、新等の目は捉えた。

（……もうやだこの人）

新等がそのような事を思っているとは知らず、ホメロン教授はウキウキと語る。

「で、量子力学の何が疑問なんだい？」

「えーとですね……、以前俺は、量子力学の観測問題の原因は、人間の意識が物質に作用するから、だという論文を発表したじゃないですか？ それについての計算式をいじってみたらですね、質量に関する数字みたいなモノを発見したんですよ。これについて、少し意見を」

「楽しそうだね、新等くん」

「伺いたく、えっ、はい？」

不意打ちを喰らった。

咂然<sup>あぜん</sup>とする新等に対し、ホメロン教授は孫の成長を喜<sup>よろこ</sup>ぶ祖父の  
ように、ウキウキと続ける。

「凄<sup>すご</sup>く、楽しそうだ。こんなにキミの目が輝いているのは、珍しい  
事だからね」

「、」

新等の今までの人生を全てを知っているような調子で、ホメロ  
ン教授は予想外の発言をしてみせたのだ。ホメロン教授の調子に着  
いていけない新等を無視して、ホメロン教授は自分勝手に言うのだ  
った。

「まあ、量子力学の質問についてはまた聞く事にするよ。ちょっと、  
時間が無くなってしまった」

「……俺への用事、ですか？」

「その通り。新等<sup>しんら</sup>くん、これは学園上層部からの直々の命令だよ。

いいや、正確には……国際連合からの任務だよ」

笑顔で。

トンデモない、爆弾発言を吐き出した。

II

『ワンヘイト研究室』。

プレシード学園所属の物理学者達に与えられた研究室……の一  
つだ。

ホメロン教授に連れられてここまで来た訳だが 同グループ  
の『ワンヘイト実験室』にて事件を起こした身としては、正直入り  
辛いのが実情だった。

「さあ、入ろうか」

「……そうかいそうかい。俺は神様に見捨てられた。オーケー、な



ら立ち向かってやるよ……運命ってやつに！」

「うるさいよ新等くん！」

「すいません……」

しゅん……、と小さくなる新等。

堅く閉ざされた、白銀色の扉。

どうやら、運命に挑戦する前にこれを打ち破らなければいけないようだ。

とりあえずＩＤカードを取り出そうとする新等　を、ホメロン教授が制した。

ホメロン教授はどうやら、そんな面倒な事はお嫌いのようだ。

そして、次の瞬間。

振り上げられたホメロン教授の拳が　ドゴンッ！！　と銀色の扉に衝突した。運動エネルギーのやり取りが生じる。

何をやっているんだコイツは、と新等が呆れるよりも前に、扉が機械的な動作音を立てて開いた。

（セキュリティどうなってんの！？　ってか、こんな方法知ってる教授もおかしいだろ！）

突っ込み所がありすぎて、正直混乱しそうだ。

何これ？　俺をツッコミキャラに固定しようとしてんの？　と思わずにはいられない新等くんなのであった。

何食わぬ顔で研究室に入っていくホメロン教授。その動きに釣られるように、緑色のシャツの上で、赤いネクタイが踊る。

呆然としながら入っていく新等。何だかもう、今日はアンラッキーデーの予感しかない。

「やっと来たか、天上。あまのがみ相変わらずトロいな」

良く知っているその声に、新等は驚いたように顔を上げた。

そこに立っていたのは、

「……何でオマエがここにいるんだよ、小隊長さん」  
清演せいえん顕路けんろ

それが、小隊長の名前だった。

白い肌。線の細い体。顔立ちはかなり整っており、漆黒の瞳は全てを呑み込んでしまいそんな感覚すら覚えさせる。長身で、纏っている服は基本的に藍色で統一されている。その端整な顔立ちから女に不自由しないであろう事は予測できる。ホメロン教授が『動』だとすれば、顕路は『静』だった。ただしその『静』には大人しさは一切無く、獲物をジツと狙う肉食獣のそれに近い。

刺々しいオーラを纏う顕路は、安心と安定の無表情で、無感動に言うのだった。

「国際連合から、オマエへの直々の命令だ。コイツを、指示があるまで保護している」

そう言って、顕路が指差した先にいたのは、ソファに座った、小さな少女だった。

見覚えのある顔だ。

「お前は、確か……あの倉庫で、テロリストに捕らえられていた……」

「マキナだよ、よろしくね。キミが、シンラくんでしょう？」

笑顔を浮かべる、金髪の少女。どこか小動物的な雰囲気<sup>ふんいき</sup>を滲ませる小さな少女は、物怖じせずに新等へと手を差し出す。顔と同じく、手も異常なほど白い。純白と言っていい程だ。

沈黙。

「……えーと、誰がなんだって？」

「だから、オマエがコイツを保護しろ。これがオマエへの任務だ。

安心しろ、今から三時間後には、世界でも一、二を争っているボディガード派遣組織から護衛が配属されるから、まあ安心しろ」

安心できないんですが、とは言えなかった。

相手は天下の国際連合。逆らったら『肅清』<sup>しゅくせい</sup>一直線だ。

ははは、と新等はいつでもよさそうな笑みを漏らした。

「まあ、世界中からマキナを狙った刺客<sup>しかく</sup>が襲い掛かってくるだろうが、マキナを逃がすなよ」

本当に最高だよ。

今日は、最ッッ高にアンラッキーだ。

## 第五解（後書き）

おせー、話の展開おせー。  
誰だよこんなの書いたの。

……今回の話は恐ろしく説明不足ですが、次話ではドバーツと状況説明するつもりでいます。  
絶対に読者を置き去りにはしません。ご安心下さい。

## 第六解

### 回想

俺とカックワードが出会ったのは、もうずっと前の事だ。

収容所。ホムンクルス 人造人間を使った人体実験を行うこの場所で、俺は暗黒としか言い様の無い幼少期を過ごしていた。

ホムンクルス 人造人間の治癒力は、もはや全生命の中で最強だと言っても過言ではない。そこに目を付けた実験……俺も、その実験の犠牲者だった。

毒薬入りの注射器を三〇回も四〇回も眼に刺された事もあった。全身を焼かれた事もあった。絶対零度近くにまで冷やされた液体ヘリウムの中に放り込まれた事もあった。万単位の電流を一〇回に分けて流された事もあった。

そして。

何よりも俺の心に響いたのは、『仲間』たちだ。みんな、恐怖から寄り添い合い、支え合って生きていた。だけど。

ある子は薬物の実験で視力を失い、『綺麗な物が見たい』と呟いた次の日に死んだ。

ある子は両腕をもがれ、『僕の夢は、技術者だったんだ』と呟いた次の瞬間に死んだ。

ある子は白衣の男達に連れて行かれたまま、戻ってこなかった。

ある子は実験によって味覚が消え、『美味しい物を食べたかった』と言って死んだ。

ある子は……、

ある子は……、

ある子は……、

ある子は……、

ある子は……………、

……

……

……

……

……………そうして俺は育ってきた。

生まれた時から、俺の人生は苦痛と暗黒に支配されてきた。

そう、あの日までは。

突然の出来事だった。研究者たちの悲鳴が響いた次の瞬間には、目の前にあった鉄格子がぐしゃぐしゃに吹き飛び、金色の光が辺りを満たしていた。それはもう、凄い光景だった。

炎の赤。血の赤。赤、赤赤赤赤、赤赤　そして、金の光が一つ。

その光は、人間の形を象っていた。

そうして、口を開いたんだよ。

『やあ、キミ。ボクはカックワード。異世界から来た怪物さ。欠陥品の化物さん、トモダチにならないかい？』、とね。

## 第二解

『……………ふふっ』

「俺のすぐ後ろで笑うな。幽霊みたいで気味悪い」

遊泳する友人の幻覚へと、苛立ち紛れに言い放つ。溜息を吐きなくなるような状況だった。

ホテルで、金髪の少女と過ごしている。……………聞こえは良いが、実際は全然そんな事無かった。

この一室は、研究がそろそろ忙しくなってくるという事で、新

等がわざわざ学園の近くにあるホテルを探し出してようやく借りられたという、苦勞がいっぱい詰まった場所なのだが……少女はそこを、何の躊躇もなく破壊していく。

別に、建物を粉碎するとか、そういう意味ではない。

幼い子供のように駆け回り、ダブルの上に置かれた雑誌やらベッドの上の枕やら何やらを、床にダイブさせているのだ。小さな怪獣の降臨に、室内のオブジェたちは恐れを抱く。

「あははーっ！ おもしろーい！」

「いいや、つまんね。マジつまんね。だからとつとベッドから降りろ！」

「にやははははー！！！」

「くそつ、ベッドの埃が！ 目がつ、目があああー！」

『新等、それ古いよ。今は二〇四五年だから、もう少し新しいネタ選ぼうよ』

『カクワード 幻覚』のありがたいツッコミに応じている暇は無い。何故なら、少女の体がベッドの上で盛大にジャンプし、すぐ傍にある、巨大なテレビ画面へとロケットのように突っ込んで行ったからだ。どういうジャンプの仕方したらそんな勢いが出るんだよ、と誰もが突っ込まざるを得ないだろう。

そして。

ガッシャアアアン！！ という、一番聞きたくなかった破壊音と共に黒いガラス片が砕け散った。

静止。

そして、テレビ画面から頭を引き抜き、顔面を血で濡らした美少女は言うのだった。

「ひゃっはーいー！」

「石頭！？！」

ぐっ、と親指を突き立てた少女の眩しい笑顔に免じて、ここは「いいや、俺はそんな聖人君子じゃない」

許す訳が無かった。

「死ねっ、クソチビ！」

「ひゃあああっ！？」

ぐりぐりごりごりがりっ！！と、少女の頭蓋骨を、二つの  
拳が猛烈な勢いで攻撃する。

少女はダウンした。

「何か言う事は？」

仁王立ちした新等が、正座して縮こまる哀れなマキナへと言葉を  
投げた。

マキナは僅かに下を向いた後、顔を上げて言った。

「許してくだ　ぷっ　さい」

「今笑ったよね！？　絶対笑ったよね！？」

「許せよもー」

「何でエラそうなんだ！」

「まったく、この程度でグチグチ言う男はモテないよ？」

「今決めた。許さない。絶対に許さない」

不毛だ。極めて不毛だ。

ホメロン教授との会話以上に疲れた新等は、だが姫への忠誠だ  
けは忘れない。

「おいおい、ガラス片が転がってるからスリッパ履いておけ……あ  
ー、あと応急処置しないと。頭血だらけだし。コツチ来い」

「えっ、平気だよ？」

マキナの一言。そして、新等は気付く。　マキナの出血が、も  
う止まっている事に。

負傷から、数分と経っていない。救急車級の傷が、これほどの  
短期間で治るなど　常人では有り得ない事だ。

「……世界法則の解、か」

思い出す。少女の別名を。少女が何一故危険に晒されているかを。  
新等の言葉を聞いたマキナは、どこか悲しげな表情になった。



笑ってこそはいるが、どこかきこちない。

俺と、同じだ。

新等は、咄嗟にそう思った。

周囲とは違う存在。

それこそが、新等とマキナの間で共通している、一本の線のよ  
うな物だった。

ひよっとして、と新等は思う。

だからこそ、国連はマキナの護衛を俺に命じたのか？

難しい表情をする新等の肩を、マキナが小突く。

ついさっきの物憂げな表情はどこへやら。退屈そうな表情をし  
た彼女は、こう言うのだった。

「確かに、わたしは世界法則の解って呼ばれているけど……どうし  
ても、その意味が分からないの。キミ、学者さんだよね？ よかつ  
たら、教えてもらいたいな！、って」

## 第六解（後書き）

ごめんなさい、嘔吐しました。  
でも、状況説明はもうそろそろです。

## 第七解

その言葉に、迷いが生じた。この少女は、非常にデリケートな存在だ。いや、少女の性格が繊細だとかそういう意味ではなく、彼女一人の存在だけで世界情勢が変化するような、大きな大きな、それでいてバランスを取るのが難しい存在なのだ。

自分が与えた情報によって、国連の意に反する結果がもたらされてしまうかもしれない……そういった、馬鹿馬鹿しい考えが浮かんでしまう。だが、馬鹿馬鹿しいからといって、馬鹿には出来ない。バタフライ効果という言葉を知っているだろうか？ 『蝶の羽ばたきによって大気に異変が起こり、台風が起こる可能性がある』というものだ。実際はただのジョークなのだが……新等がマキナに情報を与えた事で、正にそれと同じ事が起こるのかもしれない。

だからこそ、迂闊な行動はできない。そう思い、新等は『幻覚』へと視線を移した。彼はただ、黙って頷いただけだった。相変わらず、口元には微笑みが浮かんでいる。気持ち悪い。

(……分かったよ。お前が言うんなら、そうするよ)

意を決すると、新等はいつの間にかベッドの隅にちょこんと座っているマキナへと、視線を移した。マキナの目には、好奇心が満ち溢れている。まるでホメロン教授だ。あるいは、熱中した時の新等のようだ。

「そうだな。それを説明するには、三三年前……つまり、二〇一二年の出来事にまで遡らなくちゃいけない」

「もしかして、『光子の帯』なのかな？」

頭に付いた血をバスタオルで拭き取りながら、マキナが尋ねる。「知っているのか？」

新等がそう問うと、マキナは自慢げに胸を張ってみせた。残念さいズな胸なのが悲しい所である。

「こう見えても、色々と本を読んでいるからねー」

「あつそ。まあ、その『光子の帯』<sup>フォトンベルト</sup> っていうのは、宇宙空間に存在する光……つまり電磁波の塊みたいな物だな。いわゆる可視光や電波といった無害な周波数域なら、問題は無い。だけど、電磁波の中にはX線や、放射線指定されている<sup>ガンマ</sup>線なんていう、人体に影響する物もある。地球は、そんな中に突っ込んでしまった訳だ」

新等は、手に握ったゴムボールを、水で満たしたコップの中に落とした。ぽちゃん、と水滴が飛び散った。まるで、光子の帯<sup>フォトンベルト</sup>に突入した地球のようであった。

「当然、人類の脳にも影響はあった。ところでマキナ、『意識』って知ってるか？」

「何となく、は……」

「脳科学の用語さ。偽薬効果<sup>プラシーボ</sup>は、流石に知ってるだろ？」

「えーと、あれだよな？ 全然効き目の無い薬なのに、『これは風邪に効くよ』って言われてから飲むと、脳がそれを信じちゃって、勝手に治っちゃうっていう……」

「その偽薬効果<sup>プラシーボ</sup>も、実際は脳ではなく……そこに宿った『意識』が作用した結果なのさ」

ニヤリ、と。実に楽しげに、実に愉快に新等は続ける。ホメロン教授が今の彼を見たなら、こう言うだろう。『楽しそうだね新等くん』、と。

「他にも、『意識』に関する興味深い話はいっぱいあるぞ。例えば、寝ている人間の『近付かないで』という、眠りを妨げられたくないが為に発せられる『意識』は、ロボットにすら影響した。寝ている人間にぶつかるような軌道でロボットを自動で動かしてみた所、寝ている人間の『意識』がロボットに作用し、ロボットは寝ている人間を避けるように動いた」

「い、『意識』ってすごいんだね……！」

「ああ。そうさ、『意識』は凄い。これから導かれる事は、何だと思う？ 『意識は、事象そのものである』という事さ」

「どーゆーこと？」

「簡単に言ってしまうと、『万物は意識が変形した姿』という事さ。エネルギーも、俺たちも、物質も、宇宙も、時間も、空間も……全ては、『意識』が姿を変えただけの事なのさ」

「全ては『意識』から出来ている、って事なのかな」

「ああ、それで正しい。そして『光子の帯』への突入によって地球内の生物、それも主に人間の『意識』に変化が起きた。人間の意識は強化し、不可視のエネルギーを放つようになったのさ。それこそが、『交響』。基本的に、その人間の『意識』の強さに応じて『交響』のエネルギーが増す。そして、その『交響』を『現象』へと変換したのが、『念響』。いわゆる超能力だ」

実演してやるよ、と新等は宣言し、マキナから少しばかり離れる。そうして、片手を翳し、その手から、突如として白く輝く物質が出現した。

「わ、わわっ!？」

「これが、俺のただ一つの『念響』。『欠陥の生成』さ」

言い終わると同時、ふっと物質が消滅した。驚くマキナの前で、新等は苦笑しつつ言った。

「俺の『交響』は、ちよつと不安定でさ。さっきみたいに、いきなり『念響』が潰れちゃったりするんだよな……多分、ホムンクルス 人造人間の中でも相当な出来損ない、ってというのが影響してるんだと思う……は」

自嘲気味に、新等は呟いた。その顔に張り付けられた笑みは、どこかきこえない。

## 第七解（後書き）

欠陥品って、可哀想ですね。

## 第八解

マキナは、何も答えられなかった。気まづかったのではない。

新等の方から、気にするなという視線を投げられてしまったせいだ。本人が拒絶しているのに、そこを追求するのは野暮というものだろう。

「まあ、なんだ。……話を進めようか。二〇一二年の事件によって、人類は新たな『力』を手に入れた。電球、自動車、飛行機……それと同じさ。人間は、新たな領域へと踏み込んだ。そして、人間の好奇心は宇宙そのものに向けられた。かつてから、人類は『物理法則』を相手にして、好奇心を爆発させてきた。だけどまあ、それが加速しちゃったんだな。『世界法則』それが指し示しているのは、物理法則の統一表現さ」

「難しくてよく分からないや」  
「簡単に言っちゃうと、『この宇宙の物理法則には、根本的な何かがあるはずだ』って考えたのさ。つまり、物理法則を全て解き明かそうとした訳だ。今人類が追い求めているのは、『世界法則の解』。それは、つまり」

「物理法則の奥ふかーくにあるモノを、全て解き明かしちゃえ！　って事なのかな？」

「そう、その通りだ。『世界法則』の答え……それこそが、『世界法則の解』。まだまだ夢物語ではあるけど、俺たちのような学者はそれを諦められない。だって、考えてもみてくれよ。この宇宙の全てが、たった一つの理論で全て説明できるんだ！　これ以上の夢はないだろ？」

「わたしには良く分からないや」

「ははっ、これだから愚民は」

「何キャラ！？」

わははははーっ！！　と、先ほどまでの博識キャラはどこへやら、

一転して訳の分からないキャラを演じる新等。

ストレスのせいでおかしくなったのかもしれない。

だが、悪ふざけはここまでだ。

新等は突然神妙な顔つきになると、いよいよマキナの知りたかった『本題』へと踏み込む。

「さて、お前が『世界法則の解』と呼ばれている理由についてだが

—

そこだけは僅かに重たく。

少女の根幹へと、切り込んでいく。

だがしかし。

最後の一步が、遮られた。

振動。

テーブルの上に置いてあったグラスが、僅かにカチカチと鳴った。

「……？」

何の前触れもなく起こった現象に、新等とマキナは思わず視線を交わした。双方の瞳に浮かぶのは、困惑だった。

そう。これではまるで、地震の前触れのようないか。

事実、その予感はある意味では当たっていた。

ミシリ、と。床が僅かに悲鳴を上げた。

不気味な兆候に、二人は眉をひそめる。得体の知れない沈黙と恐怖が、流れる。

そして、次の瞬間 破壊音が、新等たちの耳を叩いた。

視界が揺れる。上下左右の感覚が、重力が消えていく。

つまり、自由落下。

壮絶な崩落を遂げた床と共に、部屋の中にあつた質量が全て、落ちていく。

それと同時に、天井が スオオオオオンッ！ という凄まじい轟音とともに、一気に崩れ落ちた。天井に追われるかのように、室内のありとあらゆる質量が床とともに落下していく。上からの追



っ手に対し、ひたすら逃げ続ける逃走劇だ。ただし、辿り着いた先に待っているのは、壮絶な激突死である。

「クソッ!!」

吐き捨て、落下しながらもマキナの細い腕を探す。僅かに離れた場所に、その姿は見つかった。そして、必死になって手を伸ばす。体重が軽いせいなのか、体が小さいせいなのかはわからないが、彼女の体は容易に新等の方へと引き寄せられた。

別に、マキナだけ見捨てて自分だけ助かる選択肢もあった。その方が利口だっただろう。国連からの制裁は凄まじい物になるだろうが、生き残るチャンスだけならある。

なのに、何故こんな愚かな選択肢を選んでしまったのか。新等自身も、良く分かっていなかった。

マキナを腕の中に乱暴に包み込むと同時に、新等は神経を集中させる。『意識』を僅かに増幅させているのだ。その結果、『交響』が展開され、『念響』が発動される。

一気に、交響が膨張した。

まるで新等とマキナを守る柵のように、球を上下から押し潰した形の欠陥物質。新等の念響によって生成される、白く輝く不安定な物質が現れる。

『新等ツッ!!』

遙か上方から、浮遊しているカックワードの声が届く。その声音には、心配の色が籠っていた。『幻覚』に心配されるなんて、俺は相当だな……などと捻くれた考えを抱きながら、ひたすら落下していく。

そして、落下していく欠陥物質のバリアの中で、新等は確かにその『声』を聞いた。

「見つけた、『世界法則の解』 ツ!!」

## 第八解（後書き）

ビスケットってザラザラしていて嫌いです。

## 第九解

「がッ、は　　！？」

想像を絶する苦しみだった。耐え難いほどの衝撃が肺に襲い掛かる。

落下途中で上下逆さまになったせいか、マキナの体が新等しんたうの上に押し掛かっている。だが、痛みの原因はそれではない。欠陥物質のバリアでも、衝撃を相殺する事は出来なかったのだ。

痛みに揺らぐ視界の中で、新等は捉えた。

ザリ、という音と共に、擦り切れた革靴を纏まとった足が歩みを止めたのを。

殆ど本能的な恐怖から、新等はそちらへと視線を移す。

『危ないよ、新等！！』

絶叫。それに応じて、新等は咄嗟とつさに横へ転がった。

先ほどもで新等の頭があつた場所へと、強烈な蹴りが叩き込まれる。あまりの衝撃に、床に亀裂が走つた程だった。『幻覚』のおかげで間一髪で死を回避できた事に、感謝を抱く。

そのような状況を演出してみせた少女は、壮絶な笑みを浮かべて言つたのだった。

「邪魔だよ。退いて？」

「嫌、だね。そっちが退け……ッ」

「あー、メンドーだなー。そこにいる『世界法則の解』を渡せって言つてんの。退　　」

赤髪の少女の言葉は、最後まで続かなかつた。その理由は、明快だ。新等しんたうの手の中に白い物質が踊る。欠陥物質だ。

もやもやとしていた光が一気に棒のような形に整えられ、振る

われる。

足下を掬う形で振るわれたそれを見ても少女は動じず、ただ足を振るっただけだった。たったのそれだけで爆発音のような轟音が炸裂し、空気の刀が無数に踊った。欠陥物質の刀はそれに圧されるように霧散し、たちまち光の微粒子となってしまうた。

「マナー違反だよ、キミ？」

鈍い音を立てて、その足が新等の腹へと叩き込まれる。既に新等から離れていたマキナが、小さな悲鳴を上げた。だが彼女は、恐怖のあまりその場に釘付けにされてしまっている。

「邪魔だから死ね」

笑って。そう言って。少女は、足を振り上げる。

ドンツッ！！ という音とともに、少女の体が斜めに吹き飛ばされた。

少女だけでなく、新等の目も見開かれる。

その先に立っていたのは

「ごめんなさい、と言っておくわね。遅れたわ」

白銀の髪を持った、赤目の少女だった。

驚愕の視線を完全に無視し、白銀の少女は、今まさに地上へと落下する赤髪の少女を見据える。

「『仕事』を果たさないと、ね。という訳で、あなたには『世界法則の解』は諦めてもらう」

言って、白銀の少女は手近な瓦礫に手を乗せる。それを見た赤髪の少女は僅かに抵抗の色を見せようとするが、アリシアは笑みを浮かべてこう言うのだった。

「諦めてちょうだい。残念ながら、私の交響は二〇〇〇。そして、念響は重力制御よ。この意味が、分かるかしら？」

赤髪の表情が、諦めの色に支配された。白銀の少女はそれ以上何も言わず、ただ瓦礫と少女の間の重力を制御した。

瓦礫が凄まじい速度で射出される。もはや、瓦礫は殆ど原型を保っていない程だった。衝撃波だけが、赤髪へと向かって行く。

「さっきの赤髪はホテルを通して、『世界警察』へと引き渡したわ。恐らく、彼女も『世界法則の解』を狙っている集団の一つなんでしょうね。目的は知らないけど、ろくでもないのは確かよ」

淡淡<sup>たんたん</sup>と言いながら、白銀の少女は新等<sup>しんら</sup>たちの前を歩いていく。

先ほどの赤髪が暴れ回ったせいで、ホテルは凄惨<sup>せいさん</sup>な状況になっていた。あらゆる物がぐしゃぐしゃに潰れて床に倒れている。ホテルの上層階<sup>ほん</sup>は殆ど崩壊しており、辛うじて残った下層階の中を新等たちは突き進んでいた。

「……アンタは、何なんだ？」

単純な問いだった。明快で、これ以上ないほど単純。その問いに白銀の少女は振り向いた。肩甲骨まである銀髪が、輝く。肌は、マキナ以上に白かった。美麗<sup>びれい</sup>な顔を、身に纏っている黒いドレスが惹き立てている。ある意味では、マキナとは対極の位置にあるような外見だった。

「ソーディネル社一のボディガード、アリシア・ブロードよ。国連の依頼により、貴方たちをどこまでも護衛する事になったわ」

機械的な調子で言うアリシア。冷たい肉食獣のような瞳は、赤く輝いていた。

「じゃあ、お前が派遣会社からの……」

「ええ、そうよ」

そこまで言っていると、アリシアは視線をマキナへと移した。アリシアとは対照的に、マキナの服装は白と桃色で統一されている。

「……彼女は、自分自身の状況をどの程度まで把握<sup>はく</sup>できているのかしら？」

## 第九解（後書き）

私のオーラは二〇〇〇よ。

リアルでこんな事言ってる人間居たらドン引きどころか「おまわりさん！」級のインパクトですね。

## 第十解

マキナに対してではなく、新等に投げかけられた疑問だった。新等は苦笑交じりに答える。

「全然把握できていないな……何故自分が『世界法則の解』と呼ばれているのかすら理解できていない」

「あつ、そうだよ！ わたし、まだその理由教えてもらってないよ！」

教える約束こそしてはいたが、そうするよりも前にクソツたれの刺客が、派手な襲撃を仕掛けてきてしまったのだから、仕方ない事だった。

「本人が事情を知らないで、困る場面が出てくるかもしれないわ。説明してあげなさい」

突き放すように言うと、彼女は背中を見せて歩き始めてしまった。実に機械的で、乱れのない歩調だ。

その背中は無言で、『とつとと説明してやれ』と強く主張していた。

半ば強制的に、新等は説明を始める。

「お前に対する『世界法則の解』っていうのは、さっき説明した『物理法則の完全解明』とは別の意味だ。基本的に、お前は『世界法則の解』って呼ばれてる」

「……『世界法則の解』……確かに、そう呼ばれたこと、何回もあったと思う」

「で、だ。何故そう呼ばれているか、っていう説明は少しばかり長くなるな」

会話する二人の前を、アリシア・ブロードはひたすら規則的に歩み続ける。まるで二人の会話を無視していた。

「いきなりで何だが、マキナ。お前は、『アカシックレコード世界法則の解』って知ってるか？」

「えーと、あれでしょ？ 宇宙のどこかに存在するとされる、『ありとあらゆる生命の情報が詰まったサーバー』みたいなものでしょ？」

「その通り。博識なんだな」「にやははー。それほど……でもあるねー」

マキナが本格的に調子に乗り出すよりも前に、とつと話を進める事にする新等。

「まあ、そのアカシックレコードに生命の情報が全て詰まっているという訳だ。当然、こんなモノはインチキだと、科学者どころか大抵の一般人は存在を信じていなかった」

「いなかった……？」

「さっきも話した通り、『意識』があらゆる事象の根本となっている事が明らかになった。このせいで、アカシックレコードも幾らか現実味を帯びるようになってしまったのさ。『意識』はあらゆる法則・現象に影響するほど絶大な力を持っている。そんな『意識』が宇宙には大量にある訳だから、それらが相互作用を起こして、宇宙の一点に、いわゆる『意識の集合体』を作り出してもおかしくはない、……つてというのが科学者の見解だ。元々の『生命のバンク』という神秘的な中身とは大分相違があるけど、まあ表面的には似たようなもんだから同じ名前を使っている訳だな」

ふんふん、と納得したように頷くマキナだったが、そこで、疑問が生まれた。

「で、これが私にどう関係してくるの？」

「焦るな焦るな。アカシックレコードは、意識の集合体だ。それもほぼ確実に存在すると言われている。宇宙を加速的に膨張<sup>はくしやう</sup>させているダークエネルギーという物があるんだが、その正体こそが『意識』の力だと最新の研究で明らかになっている。つまり、この宇宙には間違いなく『意識の集合体<sup>アカシックレコード</sup>』がある。思い出せよ、マキナ。『ありとあらゆる物に意識は宿っている』という事を」

それでもまだ、訳が分からないという表情をするマキナへ、新等



は説明を加える。

「生命体のそれに比べれば小さいけど、物理法則にもエネルギーにも『意識』はある。アカシックレコードには、宇宙の全ての『意識』が詰まっている事になる訳だ。つまり」

「アカシックレコードこそが、『世界法則』って事だね！」

「そうさ！ 物理法則世界法則の全てが、アカシックレコードの中に詰まっている。だからこそ『世界法則の解』……そして、マキナ。ここでようやくお前の出番だ」

「いよいよ、『本題』だ。少女の根幹へと、一気に切り込み、踏み込んでいく。」

「お前の交響オーラは、測定器ですら悲鳴を上げて逃げ出すほどの強大さを誇っている」

「……つまり、『意識』がトンデモなく強い、ってこと？」

「ああ。通常レベルの交響オーラでは、『世界法則の解』へのアクセスは制限されている。だが、マキナ……お前の強すぎる『意識』は、『意識』の集合体であるアカシックレコードを揺さぶるほどに強大なんだよ」

故に、と続ける。説明する時の口調がやや理屈っぽいのは、学者という職のせいなのかもしれない。

「お前の『意識』は『宇宙の全て』と直結してしまっている。だからこそ、お前を研究することが」

「『世界法則の解』にも繋がる。アカシックレコードとリンクしているからこそ、彼女は『世界法則の解』と呼ばれている……そうよね？」

「えっ、あ、ああ……」

徹底した無表情で会話に割り込んでくるアリシア。それに戸惑いつつも、新等は返答した。

「……そうだったんだ……わたしって、そんな存在だったんだね……にはは、自分の事なのに、全然、知らなかったよ……」

少女の小さな小さな呟きは、誰にも聞こえる事無く虚空に吸い込

まれて行った。

それとは対照的に、アリシアはこの場に居る誰もが聞こえる声で、言うのだった。

「さて、あなた達には『レコードエンブレイヤー世界法則の解』を付け狙うような輩をおびき寄せる『材料』になってもらうわ」

「……は？」

「要するに、餌になれって事よ」

## 第十解（後書き）

## 第十一解

ファミリレストラン。

木材で構成された茶色い机を挟んで、新等とマキナは向き合っていた。

そういえば、忙しくて朝から何も食べていなかった。だからといって、これはいくら何でも色々と緊張感に欠けている気がする新等だった。

囧。囧。

自分達に課せられた役目を認識し、膝の上で握った拳に汗を滲ませる。

アリシアが提案したのは、こうだ。

マキナを狙っている敵対組織は、膨大だろう。中には国家ぐるみの物もあるだろう、と。

理由は単純。

（マキナの『意識』は、アカシックレコードとの相互作用により、日付変更と同時に『覚醒』すると予測されている……）

今現在、世界中で大問題となっている課題を思い出す。新等がマキナを護衛する事になったのも、これが原因だった。

要するに。

（アカシックレコードとの相互作用によって、ただでさえ測定器が壊れるほどの強大さを持つマキナの交響が昂ぶり、尋常でない『意識』の奔流が起きる、か……。予想される被害範囲は地球だけじゃなくて、宇宙全土に及ぶ。アカシックレコードと繋がっているせいでソチラにも影響が及び、最悪、この世界そのものが壊れてしまう可能性が極めて高い。スケールデカ過ぎてふざけてるとしか思えないな……どこのSFだ）

簡単にまとめてしまうと、だ。日付変更と同時にマキナの『意識』が覚醒し、そのせいで世界そのものが壊れる恐れがあるのだ。

表面的には安定しているかのように見える社会。

だがしかし、実際は全てが滅びかねない程の巨大な爆弾を抱えているのだ。今、自分の目の前にいる少女が、正にそれなのだ。（国連は、その対処に乗り出した訳だな。一番手っ取り早い対策は、マキナの『意識』を減退すること。つまり、脳から感情を消すことだ）

脳を潰す方が手っ取り早くはある。だが、マキナを殺してしまつては、それと連結しているアカシックレコード。つまり、世界そのものにどんな打撃があるか分かった物ではない。

（だけでも、当然マキナを利用しようとするヤツらだつて出てくる。莫大なエネルギー……人間の欲望つてのは、いつだつて正直だからな）

だからこそそのソーディネル社と新等。そして、だからこそその罔作戦。

「うーん、どれにしようかなー……」

巨大なメニユーと睨み合うマキナ。

この少女に自分たちが突きつけているのは、あまりにも身勝手  
で

あまりにも悲惨な方策なのだ。

その事実が、嫌が応にも新等の心へと、罪悪感という名の重みをズシリと乗せてくるのだ。

無論、新等のような罪悪感に駆られて、この非人権的な方策に反対案を出した者もいる。だが、アメリカを中心とした賛成派の勢力は強く、？五一番目の州。のである日本も、そちら側の陣営に加わっていた。結果として、衝突の決着を付ける為、国連では現在進行形で会議が開かれている。

この少女が廃人になるか否か。それは、見も知らない権力家たちの手の中にあるのだ。

（……くそつ、これだから権力なんて大ッ嫌いなんだ）

極めて個人的な感想を吐き出すが、そうした所でどうにもならな

い。ただ、新等は国連の忠実な犬として働くしかないのだ。

「どうしたのー？ 元氣無いよー」

あまりにも長い間新等が黙考もっこうしているので、流石に心配されてしまったようだ。

輝く金色の瞳で、臆する事なく新等の『異様な瞳』を覗き込んでくる少女に、苦笑を見せる。

「……平気だよ。大丈夫さ」

言って、わしゃわしゃとマキナの髪を撫でる。金箔のような髪はサラサラとしていて、花のような香りが漂っていた。

「……むっ、子供扱いしないで欲しいかな」

「ははっ、悪い悪い」

そう言って、手を離れた。

（……まったく。何が大丈夫で、何が平気なんだよ……俺の野郎）  
こう思う事自体が、彼の本来の思考回路とはどこか違うのかもしれない。確実に、着実に。彼の中で、何かが変わろうとしていた。

## 第十一解（後書き）

序盤からいきなりこのスケールですよ。どうなっちゃうんでしょうね。

## 第十二解

アリシア・ブロードは、彼らからは離れた席に居た。だが、常に新等たちを監視できるような位置はキープしてある辺り、流石はプロだ。

横目で新等とマキナを観察しつつ、ドリンクバーから調達してきた、複数の飲料を混ぜた液体を口へと運ぶ。それでいて全身の動きには緊張の糸が張り巡らされており、警戒を怠っていない。

（天上新等、ね……あの『眼』を見る限り、ホムンクルス人造人間のようなけど……大した戦力には見えないわ。国連は何故、彼をマキナの護衛役にしたのかしら）

新等自身ですら疑問に思っている事だった。世界の命運が懸かっている重大任務に、新等が何故任命されたのか。どう考えても、世界を預けるには新等の双肩は小さい。

（考えても仕方無い、か……私は私の務めを果たす。ただそれだけよ）

「お待ちせ致しましたー。以上の品でよろしいでしょうか？」

「おつけーだよー！」 「ではごゆっくりー」

妙に馴れ馴れしい口調で応答するマキナ。だが、新等の注意を惹き付けているのは、それではない。

「なん、だ……これは……？」

テーブル。そこに広がっているのは、『地獄』としか形容のできない光景だった。

無数のデザート群。新等の注文した唐揚げと白米のセットがやけに浮いて見える。



黄色いプリンの上に乗った、茶色いキャラメル。その隣には可愛らしい、小さなバニラアイスが乗っている。長大なカップにはこれでもかとアイスやらキャラメルやらフルーツやらが突き詰められている。つまり、パフェ。五個にも及ぶカフェの軍団が、机という領地を占領してしまっている。更にそれらに追隨するように、色鮮やかなティラミスやらケーキやらが並んでおり

「……、うつぶ」

理不尽な砂糖天国の前に、思わず胃酸が逆流しかける。そんな新等の様子をどういう風に解釈したのか、マキナはチョコレートパフェを掬った小さなスプーンを、可愛い小さい手で差し出すのだった。

「食べたいの?」「どうやってたらそういう風に見えるんだ」「ふん……」

つまらなそうな表情で、口へとスプーンを運ぶマキナ。

一方の新等はゲツソリとしながら、何とか言葉を紡ぐ。

「……お前のその、狂った思考回路って糖分過剰のせいで、回転しすぎた結果なのか……?」

当然の疑問は、しかし糖分の虜とりになっているマキナには届かない。顔を綻ばせ、あまりの嬉しさに全身から輝きを放つマキナ。しかし、それに反比例して新等の食欲はガリガリと削られていく。暴君と奴隷の関係式が、ここに出来上がった。

「くそつ、おのれ糖分帝国め……俺は屈しないぞ……」

訳の分からない闘志を燃やしながら、必死で唐揚げに食いつく新等。

離れた席からそれを眺めるアリシアは、呆れ返るばかりだったが、そんな関係式は突如として成り立たなくなる。等式そのものが、壊れてしまう。

ゾッ、と。

何かしらの予兆が、ファミリーレストランに忍び寄った。血と硝煙の予感を引き連れて。

「、」  
それを感じ取り、新等は身を硬くした。既に手はポケットの中へと忍ばれており、咄嗟の事態にも対応できるようにしてある。

マキナの方も冷たく鋭い、その予感を感じ取ったようだ。手をピタリと止め、怯えるように震えだす。血色の良かったはずの肌は、今や恐怖から青ざめていた。

そして、直後。

新等が予感を完全に掴み取り、手に白い銃のような物を握ると同時に、後頭部に冷たく硬い感触が当てられた。

「動かないでもらおうか」

鈍く、押し潰すような声。聞いているだけで精神が圧迫されそうだった。

声音だけから判断するなら、三〇代後半の男性だろう。新等の後頭部に得体の知れない武器を押し当てている時点で、平和的な人物でないのは明らかだ。

目線だけを動かして、背後を確認する。押し当てられている武器は、新等の知っている物だった。

「RG-21、か。敵地攻撃を目的としたロシア軍の特殊部隊で使われていた電磁加速銃<sup>レールガン</sup>か。一代ほど前の物だし、何より　その特殊部隊はもう、解体されている」

核心を。男の精神を抉る為だけに、言葉を紡ぐ。

「何だ？　用済みの無能が、世界に対する報復を謳っているのか？　時代錯誤のクソ野郎め。まったくもって、惨めだな。全人類を滅ぼそうが、アカシックレコードのエネルギーを使ってテロを起こそうが、お前たちの惨めさは変わらない」

男の手が震えた。それに乗じて、カチカチとRG-21が音を立てる。込められているのは愚かな怒りだ。

「知ったような口を叩くな、青二才<sup>ガキ</sup>め。この世界はもうダメだ。だから我々が軌道を修正しようと　」

「黙れよ」

強く、張り詰めた声が男の精神を叩く。

「お前のやっている事は、お前たちの惨めさを増長させるだけだ。何も生みはしない。更に酷い方へと軌道をズラすだけだ。……俺みたいになりたいのか？」

男の体が、一瞬硬直した。新等の放った言葉が、理解できないといった様子だ。そして、男がその意味を尋ねるよりも早く

男の体がまるで永久磁石のように、真上へと跳ね上がった。屋根に激突し、男の体が悲鳴を上げる。それでも男はRG-21の引き金を引こうとするが、やはりそれも敵わなかった。

「残念だけど……貴方の夢は、ここで終わりよ」

冷たく、容赦の無い声。白銀の戦士が手を翳すと同時、男の重力が増大し、床へと叩き落された。

花火大会のような震動が、店を揺らす。逃げ惑う人々の波によってパニックに陥った店内には目もくれず、アリシアは新等へと言葉を投稿る。

「ロシアの元・特殊部隊だと言ったわね？」

「ああ、恐らくそうだ。ひょっとして……」

「いいえ。ロシア政府が関与している可能性は低そうよ。何故なら、ロシアはマキナの感情を潰す事に大して『賛成』の立場を取っているから。……わざわざマキナを付け狙う理由が見当たらないわ」

「じゃあ、ロシアの元・特殊部隊だったらどうしたと言っただ？」

「……いいえ、ただ　ロシアの特殊部隊とは、少々因縁があつてね」

ゴン！！　と、ハイヒールの靴底で男の背中を叩いた。呻き声が漏れるが、アリシアは注意を向けない。そして、極めて酷薄な表情で、彼女は言った。

「私の極めて個人的な都合で、始末させてもらっわ」

### 第十三解

その瞬間。

彼女の赤い瞳の奥で、得体の知れないドロドロとした物が燃え上がったような気がした。冷たい表情とは対照的な『何か』　アリシア・ブロードという人間の根底にあるのは、それであるように、しんら新等には感じられた。

少なくとも、他者にそう思わせられるだけの負のエネルギーが、アリシアの中で渦巻いている事だけは確かだ。滲み出る、機械的な殺意に空気が凍えた。体の芯のような場所から、活力が奪われていくのが新等にも認識できた。  
そして。

重力によって圧倒的な破壊力を得たアリシアの脚が、再び持ち上げられ

「　ッ!？」

ピキリ、と。アリシアの脚が、前触れもなく悲鳴を上げた。刺すような激痛が走る。重力増強による凄まじい位置・運動エネルギーの反動だろうか。……いいや、違う。そのような間抜けな事態が起らないよう、重力の数値は調整しておいたはずだ。ならば、何故？

痛む脚を抑え、店内を一瞥する。　そして、それが見えた。

アリシアを一直線に見据えた、マキナが。その眼光には力強い光が宿っており、アリシアの心を礫にしてしまう。あまりの力強さに、マキナの周囲の空間すらもが悲鳴を上げるのではないかと錯覚してしまうほどだ。

「　だめだよ」

ハッキリと。マキナの口が、言葉を紡いだ。

「　そんなの、だめなの。絶対に、絶対にだめだよ」

訳が分からなかった。この少女が何を言っているのか、理解がで

きない。

「……何を、言ってるの……？」

「だって、キミの目、悲しそうだもん」

「……は」

思考が停止する。

「……だから、『意識』を使ってコイツが殺されるのを防いだと？」  
「そうだよ」

「……そう。訳の分からない思考回路ね。まあ、いいわ……あなたに免じて、コイツの殺害は諦めてあげる」

言って、男の体に背を向けた。あまりの激痛によって男の意識は既に消えているようで、身じろぎ一つしない。

緊張の糸を断ち切るように、新等が口を開いた。

「……これで、一つの組織は釣れた。どう対策するつもりだ？」

「そうね……方策は、用意してあるわ」

具体的な内容を語ろうとする、が

『あまのがみしたら天上新等、応答しろ』『決定』が下された』

新等の頭へと、直接『声』が響いた。『意識』を介したテレパシ  
ーだ。

体を強張らせる新等。そして、『結果』が告げられる。

『議論の結果、』レコードクラッシュ『世界法則の壊』を防ぐ為、レコードエンブレイヤー『世界法則の解』の感情を磨<sup>す</sup>り潰すという方針で話がまとまった』

機械的な、声だった。

『ご苦労だった、天上新等。キミの働きが無ければ、議会の間  
レコードエンブレイヤー『世界法則の解』を保護する事が出来なかった。……では、今から  
キツカリ三〇分後にそちらの座標へと回収班を送る。マキナを引き  
渡したまえ』

## 回想

俺とカックワードが出会ったのは、もうずっと前の事だ。

収容所。<sup>ホムンクルス</sup> 人造人間を使った人体実験を行うこの場所で、俺は暗黒としか言い様の無い幼少期を過ごしていた。

<sup>ホムンクルス</sup> 人造人間の治癒力は、もはや全生命の中で最強だと言っても過言ではない。そこに目を付けた実験……俺も、その実験の犠牲者だった。

毒薬入りの注射器を三〇回も四〇回も眼に刺された事もあった。全身を焼かれた事もあった。絶対零度近くにまで冷やされた液体ヘリウムの中に放り込まれた事もあった。万単位の電流を一〇回に分けて流された事もあった。

そして。

何よりも俺の心に響いたのは、『仲間』たちだ。みんな、恐怖から寄り添い合い、支え合って生きていた。だけど。

ある子は薬物の実験で視力を失い、『綺麗な物が見たい』と呟いた次の日に死んだ。

ある子は両腕をもがれ、『僕の夢は、技術者だったんだ』と呟いた次の瞬間に死んだ。

ある子は白衣の男達に連れて行かれたまま、戻ってこなかった。

ある子は実験によつて味覚が消え、『美味しい物を食べたかった』と言つて死んだ。

ある子は……

ある子は……、

ある子は……、

ある子は……、

ある子は……、

……

……

……  
……  
……そうして俺は育ってきた。

生まれた時から、俺の人生は苦痛と暗黒に支配されてきた。

そう、あの日までは。

突然の出来事だった。研究者たちの悲鳴が響いた次の瞬間には、目の前にあつた鉄格子がぐしゃぐしゃに吹き飛び、金色の光が辺りを満たしていた。それはもう、凄い光景だった。

炎の赤。血の赤。赤、赤赤赤赤、赤赤　そして、金の光が一つ。

その光は、人間の形を象っていた。

そうして、口を開いたんだよ。

『やあ、キミ。ボクはカックワード。異世界から来た怪物さ。欠陥品の化物さん、トモダチにならないかい？』、とね。

## 第十四解

### 第三解

あまのがみしんら  
天上新等はマキナの細い手を握って、足を前へ前へと駆使していた。

国連にマキナを引き渡す為ではない。むしろ、その逆だ。

(……割に合わないのは分かってる)

天秤は、明らかにデメリットの方へと傾いている。たとえ逃亡したとしても、人類全てが敵に回っているのだから。それに、逃げ続ければ勝ち、という訳でもない。国連に肅清されるか、それとも世界を崩壊させるか。その二つだ。

(……、でも)

新等には、『あの時』の事が思い出されて仕方が無いのだ。

それは、収容所で迫害を受けていた頃の事でもあり。

カックワードが死んだ時の事でもあった。

(俺は……)

だからこそ。この少女が、それらとダブってしまう。カックワードに。そして、迫害されていた自分に。

今ならまだ間に合う、という言葉が浮かんた。国連に今からマキナを引き渡せば、間に合う。三〇分経過した訳ではないのだから。だが、新等は首を振った。楽な道を、自ら放棄したのだ。

(こいつを、マキナを救いたい)

強要された訳ではない。自棄ヤケになっている訳でもない。

願望。理想。

それが、それだけが、新等の足を突き動かす。何故そんな事をしているのか、自分でも良く分かっていた。

(俺は、過去をやり直したい。ただそれだけだ……マキナの為でも国連の為でもない。俺自身の為なんだ。だから俺はマキナも、世界



も救われる道を見つけ出してやる……！！！）

口に出すのは簡単だ。思うのはもつと簡単だ。

だが、新等にはそれなりの覚悟はあるつもりだった。

（やってやるよ。王手の掛かった盤を引っくり返せるだけの方策を見つけ出してやるよ。俺を誰だと思っている。天才科学者の天上新等だぞ。この程度、余裕だ！）

自らを鼓舞し、逃げ出しそうになる自分を叩く。それこそが、彼の覚悟の在り様だった。

そうだ。大切なのは、メリットとデメリットの天秤でもない。やれるかどうかではない。やるかどうか、その意義の価値だ。それが、行動の原動力になる。

どれだけ絶望的だろうと、どれほどの逆境に立たされようとも、新等<sup>しんら</sup>は、それを曲げようとは思わない。何故なら、『親友』とそう誓い合ったからだ。

（必ず、必ずだ。誰も傷付かないハッピーエンドを実現してやるよ）

## 第十四解（後書き）

完結ッッ！！

新等たちの戦いはまだまだこれからだ！

いつの日にか、新等の勇気が世界を救うと信じて……ッ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6831s/>

---

世界法則の解

2011年7月13日19時51分発行